

書評

編集・発行
関西大学生生活協同組合
組 織 部
「書評」編集委員会
編集人 田村民夫

吹田市千里山17
TEL 388-1121
内 線 7 7 6

われわれが「書評」紙を復刊して一年になる。復刊宣言で「大学の危機」と書いたわれわれも、この一年間の学園闘争の中で露呈されたほどには、危機の深刻さを認識していたわけではなかった。矛盾はいたるところで真黒な淵をのぞかせている。現実がわれわれに迫っている。たじろぐことなくそれを直視すること、そして勇氣をもって立ち向かうこと——知性はかくして復権するのだ。「あらゆる人間諸關係がゆらぐ現代の中で『書評』誌が、いかなる、分離と結合を、かちえるか、どのような歴史の功罪と告発を強いるか——その、問いへの擬制解答を拒否して作業を進行させていかねばならないであろう」という宣言は、依然としてわれわれの基本的姿勢である。だがこの姿勢を貫き、「擬制解答を拒否」し、「思想の根拠地」を不断に模索していくためには、われわれは一步進めて、新しい地平へと出発しなければならぬ。もはや書物を媒介にするだけでは

足らない。書評という固定した枠を破らねばならない。いかにしてか。現実と切りむすび、書物と格闘し、参画者が相互に違つた視角から問題を問いつめ、真実へ迫ることによつてである。その方法は

新しい地平への出発

組織部〈書評〉編集委員会

もちろん多様であろう。が多様の中に統一を、対立の中に軸を打ちたてなければ、多様性と諸対立の中で拡散し、徒勞の反復を味わうにとどまるだろう。

復刊後一年、編集委員会は、「書評」誌を更に発展させるべく、第一に、各号に統一テーマを設定すること、第二に、テーマに関する発言をできるだけ広い分野の人々に求めること、第三に、その形式を書評に限らず、論文、宣言、声明、

雑感など、多くの可能性を追求すること、を方針したいと思います。今号は、大学闘争をテーマに設定した。テーマの解題に代えて、次のフォイエールの言葉を諸兄姉に贈りたい。

「見せかけは現代の本質である。我々の政治も見せかけであり、我々の道徳も見せかけであり、我々の宗教も見せかけであり、我々の科学も見せかけである。今は、真理を語る者は厚顔であり不作法であるとされ、不作法である者は不道徳である。真理は我々の時代にとっては不

道徳である。……しかし我々の時代においては、真理は単に不道徳性であるばかりでなくて、また非学問性でもある。学問が真理に到達して真理になるところでは、学問は科学たることをやめて警察の対象となる。即ち警察は真理と学問との間の境界なのである。真理であるのは人間であつて抽象的な理性性ではない。また、真理であるのは生活であつて、紙の上止まっている思想・自分によさわし

い全実存を紙の上にもつている思想ではない。それ故に、直接に筆から血へ移行したり理性から人間へ移行したりする思想は、もはやならん学問的な真理ではない。学問とは本質的に怠惰な理性がもつていところの無害で意旨なきがしかし、また役立つ遊び道具に過ぎない。学問とは単に、生活や人間のためにどうでもいい事物を取り扱うものに過ぎない。それ故に今は、頭脳においては途方にくれており心臓においては無活動であるというのが、即ち真理を忘れ節操を失なっているというのが、簡単に言えば無性格が、真正にして推奨すべき純粋な学問に必要な特性なのである。少なくとも必然的に現代のややこしい問題と接触しているような学問の学者にとってはそうである。しかしながら、犯し難き真理愛と決然たる性格とをもつている学者・正にそのために一撃もつて正鵠にあたる学者・害悪を根こそぎに危機や決定的瞬間をたえずもたらす学者——かかる学者はもはやならん学者ではない。どうしてかれは学者なのか?（『キリスト教の本質』第二版序言、より）。

関西大学生協同組合

組織部<書評>編集委員会

1969.5

第9号

<書評> もくじ

新しい地平への出発 1
組織部<書評>編集委員会

バリケードに賭けた青春 3
日大全共闘編

叛逆のバリケード 6
日大文理共闘編

今日の大学問題 7
日本共産党中央委員会編

大学闘争の発言 / 雑誌と単刊本

特集・学園闘争とわれわれ
全共闘バリケードを構築せよ 13

<反大学=全共闘>旅団を
千里山全域に解き放て！
滝田 修

自己否定の論理 18
花房勝治

1918年2月革命 20
西ドイツSDS<ヴェス・トゥン>誌



バリケードに賭けた青春

日大全共闘 編

(亜紀書房・四八〇円)

現在、書店には学生運動に関する本が氾濫している。最近の傾向として、それらの中に闊かつて学生自身の編集になる本が数多く出版されつつある。日大においては、当初、アングラ、出版されていた文学部闘争委員記録編『叛逆のバリケード』に続いて、全共闘編『バリケードに賭けた青春』が出版されている。

前者は熾烈な闘いの日々の記録であり、後者は、全共闘の闘いを支持する評論家らを含めた日本大学の、そして日大闘争の本質を探り出し、それを全国民の前に突きつけ、訴えようとするものである。

日大が関西大学にとって何であるのかこの問いに答えてくれるには、これらの本はあまりにもダイナミックな胎動を描いている。

石を投げれば大学生に当たる、といわれるまで肥大化し、大衆化した日本の大学にあって、日本大学には全国学生の10パーセントを擁する日本一のマンモス大学である。

東京大学がそうであるように、日本大学は、現在日本の「秩序」をささえる一方の突出部である。労働力再生産工場としての総ての大学にあって、日本大学はこの経営の近代性・合理性において私学

の雄であり、全ての私学経営者にとってのカガミであり、垂涎のまとなのである一端であれ日本一である故に最も鋭く矛盾を露呈し、大学当局と学生との対決も鋭く激しいことで最先端になっている。

日大各理事直系の日本刀・ライフルの右翼・プロ暴力団・体育会・応援団との文字通り生死を賭けた闘い、たった四十六人の学生に対してすら、八百発の催涙ガス弾・有毒ガス弾でもって攻めてくる機動隊との闘い、さらに三十四億円にのぼる便途不明金、その最高機密を知る会計課長のナゾの失踪、理工学部会計課徴収主任の自殺、教授小野竹之助の裏口入

学謝礼金五千万円という腐敗の大スケールさ、そして一機動隊員の死、すべてが日本の大学が始まって以来の不気味な事件の連続である。人は日大闘争を、大学当局の三十数億の脱税問題が原因だ、日大の封建制が原因だ、という。果してそうであろうか。

なる程それは一つの契機ではあった。しかし彼らの強固なバリケードは何を表明しているのか、それでは説明できない。本書はその問いに明確に答えてくれるであろう。

I 大学・その不毛性

「現実に入ること、闘争に入ること、あの人の講義が聞けなくて残念だというのはひとつもない」(六五頁)。これが日本大学の日常性であった。というより日本の大学に共通する日常性であろう。東大が官僚を製造する場であるとするれば日大は、中堅労働者を生産する工場である。

もともと現在の大学というものは、学問研究の場などという美字麗句とは関係ない次元で、優秀な労働力を割り出すことを目的としている。おとなしく従順な羊の如き労働力商品を生み出すことをもって「大学の社会的責任」と称するのである。「社会的責任」とは「企業に対する責任」のことではないのだ。

大学における学問は、理工科系に露骨にあらわれているように、大資本の金でそれらの資本に奉仕すべく研究がすすめられている。そこで学ぶ個人々人はより良い職場を確保すべく汲汲して、この「秩序」が「大学の社会的責任」として維持され続けてきた。一方では企業のエゴイズム、他方では個人のエゴイズム、これが大学の姿である。

大学の現念はいくらでも美しく、輝かしく語ることができよう。しかしアカデミックシヤンが、社会機構の一翼としての大学は理念とは関係なく存在している。そこでは理念はただ現在の隠蔽する役目を果

そうとするものでしかない。

これは、教師と学生の関係を云々したり、また対話を強調したり、学生参加を語らうと、はるか彼岸に原因があるのだから、ならんら問題の解決にならない。現在の全国の大学問題は、資本と、その下であえぎ続けている全人類との関係、の問題なのである。

大学問題は社会の土台の問題なのである。それは日大・東大闘争が大きくなるにしたがい、意図することなく国家権力との鋭い対決を余儀なくされたことから明らかだろう。そして今や大学は「良くする対象として存在する」のではなく「壊さねばならぬもの」(二七七頁)でしかないのである。

II 日大の否定とは

「師弟関係の対話がない……といったことを学園紛争の理由にあげる識者もいるが、日大においては弟子が師を知ることが皆無であっても、師は弟子の一人一人について、一級会社的人事課や一流興信所なみに、徹底調査してはいた。それら一枚一枚の身上調査はファイルされ時に応じて、右翼学生を呼び、そのうちの一枚を黙って指させば、たちまち、指で示されたところの学生は襲撃されるという、さながらゲンキボタボタの調査力と機動力を持っていた」(二八二頁)

芝田進午・日高六郎・羽仁五郎らの講

演が日大でもたれようとする時、必らず体育会学生と応援団が乗り込んでこれを妨害し、乱闘になれば主催者学生だけを処分する、というまれにみる徹底さをほころ、ある人達にとつて非常に好ましい大学であった。

日本の支配層にとって日大は、八幡製鉄と同じく、彼らをささえる巨大な柱なのである。形式的な暗黒政治は、最も進んだ資本主義即ち帝国主義をささえる、最も先進的な機構が維持されるために必要な、それ故合理的な姿だったのである。

だからこそ学生の闘いは、せめて早慶なみに、といったものでなく、教育を、産業に、した大学機構を生みだした背景自体の変革を志向するものとなった。日大を否定することは三菱・三井を否定することなのだ。

まさしくこれは一つの革命、マルクスがレーニンがいようところの、革命である。

III 日大生の反旗

長く暗い弾圧と抑圧の歴史は、今や学生の一斉蜂起の前に幕を閉じようとしている。

全国大学の学生運動が十・八羽田闘争によつて質的転換が成し遂げられたが日大も例外ではなかった。

「山崎君殺殺犯人」としてデッチあげられて国家権力に二人の学生が逮捕された

時、激しい思想統制と学生支配に呻吟していた日大生がこの時の驚きは、すぐさま共感となつて広がったのである。

そこに二十億脱税事件である。集会の禁止・当局と体育会学生からの弾圧の下で彼らは、クラス・クラブで、学内でできなければ道路で集会を開いた。運動は必然的に原則的な地道な活動であつたらう。

それは、守る、ということを守り、状況をとされていたことにもある。

集会に参加しているものを、学生証検査と証してチェックしようとする当局の策謀は処分を目的とするものである。それから自らを守り、集会を守るためには、検査所を突破する固いスクラムが必要であつた。集会に参加した一人一人は自主的に、生まれて初めてのスクラムを組んだ。スクラムの列は道路にあふれ、誰に命令されたわけでもなく、誰に教えてもらわねばもなく彼らは、デモを、たとえ二百米のデモであつたにしても、体験するのである。これは輝かしい第一歩であつた。

六月十一日全共闘主催による大衆団交を大学側が要求する全学総決起集会が、一万人の参加をもつて開かれた。集会をもつとした経済学部・学舎は、異常事態・授業不可能・休講・校舎からの退去命令が経済学部当局から出され、集会の最申人口のシャッターを降されようとし

た。憤激した学生がシャッターを降さまいとして校舎の中へ入っていた。退去命令で誰もいないはずの校舎の中で彼ら待っていたのは、木刀を持って陣頭指揮する大学職員にひきまわられた、黒い学生服の自民党青年部や右翼暴力団の襲撃であった。

驚く暇もなく今度は階上から、学舎前に立錐の余地もないほど詰めかけている学生の頭上に、鉄製のゴミ箱・机・椅子、あげくは砲丸投用の鉄球の雨が投げ落されてきた。負傷者は数知れず続出した。

午後五時、八百名の機動隊が日大へはじめて動員されてきた。「右翼学生を規制するため」と思い込んだ学生は機動隊を拍手で迎えたが、機動隊は決起集会に参加した学生を実力排除にきたのである。国民を守るはずの機動隊は自分たちを守るどころか、やられている自分たちをやっつけにきた。機動隊は右翼を守るためにしかないとするなら、学生は、自分を守るのは自分しかない、自分自身で守らなければならないと知った。

そのような意志をもってストライキを得意した。

その後の右翼の流血を伴う激しいテロに抗するため、良心的な学生は総て、何のためらいもなく、当然のことだが、ヘルメットと角材を手にした。右翼とプロ暴力団の日本刀・ライフル・空気銃の

前の角材はあまりに弱い。今度は鉄パイプを皆んなが持った。パリケードはいつ右翼と機動隊に襲われても身を守れるような堅固なトリデでなければならぬ。学生運動史上かつてない強固なバリ。が築かれた。意志表示としてではなく、身を守るための。バリ。だ。学生たちは。バリ。の中ではじめて安心して身を置くことができた。

IV 死闘を越えて

九月三十日両国講堂にて大衆団交。かつて創価学会が二万五千人を収容したという両国講堂は、その、椅子を取り除いても満員になり、階上の床は学生の重みでひびが入り、議長団から機度も警告しなければならぬほど集まった。述べ五万は堅いだろう。

団交の席上、出席した理事は古田会頭を頭に総辞意を表明、その後の佐藤の介入、古田の居残り、機動隊と右翼のスト・パリケード破り、負傷者、被逮捕者のおびただしい数、しかし、たちまちのうちに、バリを守るため集まってくる新しい幾十人の学生、その都度学生は鍛えられ、変革されていた。

真の学問の場がそこに生まれる。自主講座の講師との激しい討論、その時兩者には真剣にうち込む者のみが見せる涙があった。

『週刊マンガ』は『朝日ジャーナル』に変わり、麻雀の眼は、『資本論』を読む眼に変わった。

旧い秩序を破壊する過程は同時にかけがえのないものを生み出す過程であった。自らを考え、自ら学ぶということ。そして何よりも、全存在を賭けて闘うことの中にしか生きる価値がないということ。

後進的な意識から発した日大の運動は、過去これまでに最も先進的な闘争をもつたの大学より、はるかに質の高いラジアルな闘争となった。九・三〇大衆団交の席上、五万の学生によってインテラーが歌われた、ということ、そのことを証明してあまりある。

早稲田の百五十日の闘いが、中大、明大、東大の闘争がいかに先進的であろうとも、集会に参加した大衆全員がインテラーを斉唱しただろうか。

日大闘争は、校歌で終る他大学の闘争とははやく次の違う大衆の革命的蜂起であった。

日本の学生運動がかつて経験したことのないダイナミズム、五万の学生が一斉に唱うインテラー、強固なバリ、鉄パイプにヘルメットで、日本刀とライフルと対峙し、二百五十日完全ストライキを闘い抜き、今も闘い続けている日大生、そして全学共闘会議の闘いは、日本人が初めて経験する革命であろうか。この高揚は

革命の現実性と、限らない教訓を与えてくれる。セクトの在り方、全共闘運動、反大学等々……。

機動隊Ⅱ国家権力と大学当局Ⅱ右翼体育会との教限りない闘争で、いやが上にも自己変革を迫られ、それをみごとになしとげた彼らは、大学を「破壊」し、社会を「破壊」し新しくそれにとつてかわるべきものを創造していく。

彼ら全共闘の構成員はマルキストばかりではない。キリスト者もいれば仏教徒もいる。そして彼らも今ごろ乱闘の中に身を投じているだろう。手に鉄パイプを握りしめながら。

『パリケードに賭けた青春』は、変革すべき体制の覆敗をあばきたし、日大全共闘の思想を日本の全国民の前につぎつけてきた挑戦状であり、熾烈な闘いへの招請状である。

(中村宏二・文三)

国家暴力の秩序の否定

実存を實踐として

季節はいつも冬だった。かわいた風が暗い街路を吹き抜けるとき、貧しい人々はいつも一人で、もはや失った未来を背負い、心の空洞を吹き抜ける風の冷たさに耐えていた。あるいはずっと梅雨だったのかも知れない。希望に飢えた人々はいつとも雲が切れるのを待っていた。工場の屋根に陽が落ちる頃、若者達は今日も魅惑的な夜の街にでかけて行く。しかしこの虚偽の社会にある与えられた快楽を享受すること、明日の労働との断絶を彼らは知っている。求める快楽をすべて享受しても、なお彼らの心の空洞は塞がらない。この社会は人々の欲求までも管理する。盛り場の真ん中で顔をゆがめて笑っていた若者が、笑うのをやめたときふとみせる淋しき、ぼくたちは時々泣いている。そうぼくたちはいつも飢えていた、自殺しそこなつた希望が見る夢を生きたためにはあまりにこの世界は貧しい。

黄色いノートをもつてものしずかに

無感心に教壇に立っている学者。権力者のようにエネルギーにその豊満な身体をゆすって笑う教授。四年間、講義にも出ず便所の壁に、憤怒と絶望の言葉を投げつけていた学生がいることを知りもしない者達。まして、談笑しながらキャンパスを歩きかう学生達の心に單噴う未来に対する嫌悪感な

叛逆のバリケード

日大文理共闘編

(三一書店 四九〇円)

日大闘争、その二百数十日の熾烈な闘いは、この虚偽の社会の表面を刮きとりその魅惑的な諸形態の裏にある本性を露呈させ、それを一つづつ闘っていく過程であった。と同時に、管理され統制され、従順なサラリーマン予備軍として飼育されていた学生が自らの内部にある秩序感覚を、そして自からの存在を過去、現

ぞ気づこうともしない者達。

学生は蜂起した。『叛逆のバリケード』それは、生き、自己を表現し、自由であるとする欲求の名において、支配者とその機構を根底から否認した闘いの記録である。その闘いは試行錯誤というふうなふさわしい。彼らは手さぐりでこの暗い世界の構造をさがしてゆく。ぼくたちはこの本から彼らの硬直した怒りと、逆に自己を表現することを知った者のある種の明かさを読むことができる。「日大闘争は、我々の世界へ、アンガジェさせる」。彼らの闘いから季節は甦える。

在、未来にわたって否定して行く自己変革の過程でもあった。特筆すべきは、彼らの闘いが頻りに闘うことである。そして一つづつの闘いの総括と蓄積の中から運動の展望を削り上げていった。そうすることに、右翼―古田体制―機動隊―困

家権力、と彼らの闘う対象は急速に深化し、その闘いは強力になっていったのである。よく彼らは「暴力学生」と批難される。たしかに彼らはすべてを破壊し、機構を瓦解しようとしている。しかしこの破壊も、彼らが削り上げようとしている新しい大学、新しい学生のもつ意味に比すれば取るにたらないものだ。現象としての暴力を批難することで、彼ら日大生達が始めて自分達の生きている諸制度に責任を感じ、それに呼応する行動をしたという事実を目をおおうわけにはいかない。現象を批難することによって本質を隠蔽しようとするのは支配者の奸策である。情熱をこめて築かれたバリケードの中で、今かれらは腹藏のない嬉々としたコミュニケーションを削り上げ、新しい学園について、まさに彼らのイメージを真摯に問かわせている。断絶、孤独、コミュニケーションの貧困、青年の内部をビールのように侵蝕するこれら現代病の原因は、まさしく彼らを上から規定し、規制する管理機構にあった。彼らは、彼らの自由への欲求のまにに暴力的に立ちふさがるとの機構の従者達（それはこの機構によって利益を享受している人達なのだ）と具体的に闘うことによってこの

無惨な自己矛盾

歴史的・論理的認識を欠く

当面する大学問題

(日本共産党中央委員会出版局 430円)

ことを知った。そこでは感性を裏存として、裏存を裏存として、きわめて人間臭くトータルな生存が彼らの日常性を止揚していった。

現在日大闘争はむずかしい時期にきている。彼らのバリケードは機動隊によって蹂躪され破壊された。しかし彼らは決してこの闘いを放棄しないだ

ろ。いやできないだろう。「生きよう」、「自己を解放しよう」という根源的な欲求を彼らは知ってしまった。「家族や日常性に背を向けてそりや淋しいときもあるけれど、でも生命を賭して闘うってやっぱいいいな」といって快活に笑っている一人の日大生を想い出す。また日大闘争が一人日

大だけのものではなく、全ての大学の問題として、それにこの社会の問題として設定され闘かわれている以上、この闘いを持続し、かちぬいていくことはぼくたちの問題でもある。すでに彼らの提起した問題を引き受けた全国の大学で闘いは始まっている。ぼくたちも時代に遅れるわけにはいかない。こ

の学園とこの街について、そしてそこにいるぼくたちの存在についてぼくたちは話しはじめよう。個人の本来性に基づく社会をふたたび造りあげよう。生き、交流し、創造しよう。青年であることが許されるひろい荒野への旅立ち。

(S)

日大、東大を面期とする、全国七〇数校に及ぶ学園の闘いは、それぞれの個別の学園内部の諸問題をきかけとされている。その方法・形態・意識において、きわめて同質的の闘争として展開されていると言え。公刊された記録にぎつと目を通してみただけでも、およそこれまでの学生運動とは違った、新しい質をもった、あるいはより根源的な問題へと現実に向りつつある運動であることがわかる。だが問題が市民社会にある程度隔離された特殊社会とされている大学の事柄である故か、日本の各政党は、自民党、共産党を除いて明確な見解を出していないように思われる。そこで、ここではとりあえずまとまった形で公けにされた日本共産党の見解、「当面する大学問題」について、吟味してみることにする。

本書は昨年十一月から後の「赤旗」「前衛」に掲載された諸論文の集成である。

り、党の公式見解と受け取ってよい。その内容の検討に入るまえに二点だけ注意を喚起しておく。一つは、「全共闘」一派は「トロツキストに対するその激烈な非難は、もっぱら「東大共闘」に向けられており、同じく半年余にわたり武裝バリケード占拠した大衆団交で闘い、十一月二十二日以降実質的に東大と結合した「日大全共闘」には非難の矛先が向けられていない」ということ、次に、東大闘争に関して、十一月以前の段階についての論文がまったく収録されていないということ、である。何故か。とまれ、ここでは問題を提示するだけにとめておく。

者。党の大学問題に対する基本的姿勢、射程距離がここに表現されている。「まもるたたかひ」をどう「学園の民主化、学生の生活と権利、学者、研究者の学問自由、を。(ついでながら、「民主化をまもる」という日本語を「正々堂々と」使う言語感覚を疑わざるをえない。さすがに気がひけて「民主主義を、まもる」とは言えなかったのだから、「民主化」≠「民主主義的の制度にする(運動)」と考えれば、識らずに本音が出たというべきか。だからから——政府の反動的文教政策と、その下での「非民主的な」大学当局教育条件の劣悪化、さらに民主化運動を阻碍する「全共闘」一派、から、いかにして——民主的に選出された学生代表が、民主的教職員と共に、民主的な節度を維持して、大衆な民主勢力の支持と共感のもとに、大衆の総意を民主的に結集していくことよって、である。その具体的方策は、「学

長および教員、職員、大学院生、学生などから民主的に選出された一定数の代表によって構成される全学協議会（14ページ）という制度を確立することである。およそ「民主的」「民主主義」という言辭の出でこないページはないという意味では、見事に一貫している。たとえ「非民主的な」大学当局や反動政策に対しても、民主的に関かうという模範的な路線は、その論理の行きつくところ、たとえどんな小さな改良でも「民主的に」行なわれた選挙において多数を占める以外にない。即ち、「参議院選挙の勝利のためにも、このたまたかい（大学民主化闘争）は、きわめて重要な緊急の任務の一つ」となる。（94ページ）。かくて、すべての道は選挙へと通ずる。徹頭徹尾形式的な民主主義は、必然的に選挙における多数の獲得以外に自らを実現することはできない。だが制度としての民主主義は、まさしくブルジョアジーの支配方法ではなかったか。ブルジョア社会にもっとも適合した政治形態ではなかっただろうか。なぜなら、こうした形式民主主義こそ、すべての階級・階層・集団を私人に解体し、すべての個人を商品交換社会の中で目さきの私利私害のみによって働く私人に解消し、人間と人間の関係を私人と私人の関係として現象させることによって、ブルジョアジーの利益を貫徹させ、自らを政治権力として実現させ持続

させる、もつともすぐれた方法であるからである。社会的分業体系、工場内機械体系が高度化した現代資本主義社会では、支配Ⅱ被支配、抑圧Ⅱ被抑圧の関係が直接目に見える形で現われているのではなく、民主主義的制度を媒介にして、管理Ⅱ被管理、操作Ⅱ被操作として現象する。だから人民大衆は一切の自主性を奪われ、一切の自発的政治行動を喪失せざるをえない。かれらの欲求、意志は自己の表現形態を見失って、ただ不満の個人的累積と意識を積つてなきにすぎない。だが大衆は、自らの意志を積極的な形で表現する方法を見つけることはできなくとも、直観的には事態の本質をつかんでいゝ。政党不信、政治的無関心がそれである。これは日本人民の政治的無知とか政治的後進性などではない。消極的ではある、民主主義の幻想性を糾弾していることのできなない政党は、大衆の意味でも政治的前衛ではありえない。ましてやブルジョア権力が、この大衆の批判を敏感に捉え、共同幻想の実体化・制度化たる民主主義がそれとして機能できなくなつたことを認識し、自らの政治危機を、自らの法体系を破棄しつつ克服しようとしているときは、日本共産党が民主主義の幻想をあくまで実体として宣伝しようとするのは、偽善であるだけでなく、権力の補完作業を遂行すること以外の何物でも

ないのである。ブルジョアの支配の政治形態たる民主主義の枠内で、形式をそのまま譲り受けて内容だけ変えるというものは、論理的にも成り立たない。新しい酒を入れるには新しい容器を必要とするのである。

およそ歴史的・論理的な認識を欠いた本書は、至る所で無惨な自己矛盾に陥いつている。「非民主的な大学を民主化する」運動は、まず一部のトロツキスト暴力学生から運動そのものを守らねばならぬ。なぜなら「まさに大学における民主主義は、……トロツキスト暴力集団の民主的権利の侵害、民主主義の破壊による民主的運動への敵対によつても、危機にさらされている」（186ページ）からである。だがその為には、民主主義をめざす「すべての大学人」が団結して、暴力集団を武装解除しなければならぬ、というのである。ここでは獲得すべき民主主義が、いつのまにかまもられるべき民主主義に変質している。非民主的な大学が「民主的な大学に変化してしまつていゝのである。この変質は現実の闘争の中でより重要な意味をもつてくることは、たとえば、民主的な「全大学人」による自主防衛という形で展開した東大以後の関西各大学での遊バリケード封鎖が明白に示している。つまり、共産党Ⅱ民青が「民主的」とした全大学人には、大学当局、右翼教職員も含まれざるをえないと

いうことである。だが、これも偶然ではなく必然である。なぜなら、政府自民党から財界、右翼に至るまで、権力行使をすべて「民主主義擁護」を合言葉にしているのだからである。では共産党が自らを権力と區別しうる正当な理由はどこにあるのか。それは、第一に、党は権力と闘つていゝということ、第二に、党は圧倒的多数の基礎に立つということ、第三に、その指導のみが唯一絶対であるということ、これら検証の不可能な命題を、絶対無謬の前提としていゝることによつてである。この絶対の前提があつてはじめて、反党Ⅱ反共が成立し、「左右の反党分子と野合し、毛沢東一派の支持をうけて△反共大連合Vを形成している」（81ページ）トロツキスト分子をまず打倒することが正当化されるのであるし、また、「官憲にむけられていゝだけでなく、民主勢力にもむけられていゝトロツキストの暴力」（21ページ）を、官憲と闘かう前に打倒することが正当化されるのである。だがこの前提の一つが明白に欠けている場合、たとえば、「全共闘」一派が大衆の多数を吸引していた日大闘争や、東大闘争の秋以前の段階についてはどうか。共産党Ⅱ民青は黙して語らない。権力の苛烈な弾圧の中で、闘争が圧殺されようとする段になって、私利私害の侵害に耐えられず、日常意識に埋没した一般学生のエゴイズムに直接結び

ついで勢力を拡大したが、東大における民権ではなかったか。それをしも民主的と呼ぶとすれば、政府権力や加藤総長代行と何ら変わることはない。さらに、民主主義と暴力との機械的分離の結果、民権系学生による暴力的バリケード解除を正当化することがきわめて困難となる。では共産党はいかに答えるか。ブルジョア法体系にすっぽりはまりこんで、「正当防衛権」を持ち出したのは、苦肉の策ではあるが、前衛を自称する党がどれほど墮落しうるかの典型でもある。

「正当防衛権は、国際法の上で、国家の固有の権利として自衛権が認められているのと同様に、国内法の上で個人の固有の権利として認められているものです」(106ページ)と述べ、その後長々と刑法の条文を引用している。少なくともマルクス・レーニン主義党を自称するのならば、国家論のイロハ位は知っていてもいいと思うが、そのことにはこれ以上触れないとして、法文解釈上も、武装して待機している集団に「個人の固有の権利」としての正当防衛権があるなどとは、およそ政府権力の行なう拡張解釈と同質のものであろう。しかも更に、「政府、自民党はさかんに△自主防衛▽をいい、△国民は自らの國をまもる気概をもて▽などといって、……国際法上の自衛権を強調しながら、それと法理論上同じ性質をもつ個人の正当防衛権を攻撃して

いるのは、まったく矛盾しています」(106ページ)と言うに至っては、晒然とせざるをえない、もし政府が共産党の主張する正当防衛権なるものを認めるならば、党は政府の宣伝する自主防衛論を承認するのだろうか。しかし、共産党は日本をまもるためには、挙国一致して闘う気概を示したと言えよう。民族主義の泥沼にどっぷり首までつかっているのである。

最後に、東大闘争の一年余にわたる経過のなかで、これまでの学生運動とまったく違った質が明らかになったという点に、簡単に触れておきたい。この闘争の特徴の一つに、助手、院主が先頭に立ち、最後まで頑張ったことが挙げられるが、その意味するところは何であらうか。それは、大学における学問・研究自体が、内部から墮落していることに対する告発であったのである。そして、進歩・保守・反動を問わず、自らの学問の隣りに無自覚な教官を告発し、同時にかれらに加担している研究者としての自己を否定しようとしたのである。あるいは、大学とは何か、学問とは何か、研究者とは何か、という根源的な問いを発したのである。これに対して、共産党は「大学の相対的独自性」といい、「大学の真理探究の府としての性格」(96ページ)を、何の疑いもなく前提してしまっている。まさに「真理探究の府」ということ

が問われているにも拘らず。一月十八日、至近距離からガス弾を打ち込む機動隊の攻撃を、「△見物▽の教官たちが、△なかなか命中しないものですね▽、△もつと狙わなくちゃいけませんよ▽、△動いてますからナ▽」などとさきやいてい」(『中央公論』三月号、107ページ)光景、およそ一切の良心と知性を喪失した教官たち、そしてかれらによって支えられている大学、かれらによって営まれる学問とは、一体何なのか。これが、「全共闘」の問いであったし、だからこそ、かれらは闘い続けたのである。共産党宮本書記長が「一般学生はそうではなくて、いまの社会制度のわく内で改良しようとしているのです」と発言しているが(133ページ)、党指導者たるかれには、問題の所在すらわかっていないと言っはあはああるまい。

書評というよりは批判的感想という形態になってしまったが、反論を期待したい。

(三位田耕・大阪労働者学園講師)

(なお「続・当面する大学問題」

(三六〇円)も出版されている)

大学闘争の発言——雑誌と単刊本

「——われわれの闘いは勝利だった。全国の学生・市民・労働者の皆さん、われわれの闘いはけつして終わったのではなくわれわれにわかって闘う同志諸君が、再び解放講堂から時計台放送を行う日までこの放送を中止します——」

硝煙こもる安田解放講堂からのこの短かいメッセージは、日大、東大を突破口としての全国的学園闘争の昂揚、新たな質の転換を告知した。

闘争の実存的問いにみられるように、指導を拒否している。そこに、社会的人間資本制生産過程に組み込まれている自己の矛盾への真摯な問いである。とともに、占拠、それは校外からの解放への物質的依拠の場（運動）の創出であった。

日大、東大さらに全国的闘争としての京大、立命館学園闘争それは現在を生きるひとりの人間の内的な必然から展開された。闘争の持続化は単に時間的経過の長短でもって計られるものでなく、闘う組織への解体と創造のまさしく生きた闘争であるといえるだろう。

この運動体の創出のドキュメント、例

例えば『叛逆のバリケード』、『日大文理学生部闘争委編』『バリケードの青春』（日大全共闘編）、『攻撃的知性の復権』（東大全共闘、山本義隆）、『岩の上

にわれらの世界を』、『東大全共闘編』など、相次ぐ書籍の刊行。発言は、新たな学園闘争の内容を、その提起した根源的・非和解的問いを、自己に対する矛盾の新しい現実をそこに主体的に把握すれば、必ずとそこに読者と著者との緊張関係がつけられる。そういった意味でこの間相次いで、発言を、雑誌、書籍から、①闘争主体と②インテリゲンチヤの発言を可能な限りあげてみた。なお報道記事の内容のものは省いた。

◆ 闘争主体からの、発言。それは、資本制下の矛盾体としての自己の確認と、闘いへの組織形成を語る。また、それは、闘争の、高みへの限界をも、自己へ提起することによって、闘争の内的必然性を大胆に示した。

▼叛逆のバリケード（日大文理学生部闘争委）

▼バリケードの青春（日大全共闘）

▼大学占拠の思想（秋田明大日大全共闘

議長編

▼日大闘争（日大全共闘）

▼岩の上にわれらの世界を（東大全共闘編）

▼果てしなき進撃（東大全共闘）

▼東大全学共闘会議——われらにとつて東大闘争とはなにか——

▼炎で描く変革の論理（東大全共闘経済大学院）

（注：記録・報告として、全共闘の機関紙として東大全共闘『進撃』、京大全共闘『STRUGGLE』、他に『京大新聞』『関西学院新聞』）

▼攻撃的知性の復権（東大全共闘・山本義隆）

▼東京大学——炎と血の岐路（現代の眼⑧）

知性はわれわれに進撃を命ずる（東大全共闘、座談会）

かくて反戦青年委員会も……（蔵田主成）など掲載。

資料として、『国家暴力の秩序から東大の解放を』、『加藤学長代行を弾劾する』（東大闘争弁護団）掲載。

▼新しき造反の場（京大と立命館（現代

の眼④

欺瞞的民主制へのあくなき闘い（京大全共闘、座談会）共同的秩序の解体を求める（滝田修京大）

▼全共闘運動と京大闘争（情況臨時増刊号）

合理主義を告発する（山本義隆）

学生反乱を総反乱へ（秋田明大）

ノンセクト・ラジカルの思想（巖首悟東大）

▼入試阻止と関西学生運動（日本読書新聞、一四九七号）小俣昌造（京大）、渡辺照（関学）

▼立命館民主主義破産と解体の論理（日本読書新聞、一四九八号）立命全共闘座談会

▼反大学（情況②、秋田明大、山本義隆）

▼日大闘争の本質（世界①）羽仁五郎・秋田明

▼ブルジョア大学否定の上に（情況④）滝村一郎東教大全共闘

▼勝利へのスクラム（東大民中主化行動委員会編）

東大変革への闘い（東大闘争記録刊

行委員会編)

◇ 闘争が提起した矛盾体の自己・思想・国家・学問への、教授陣、知識人の発言。

▼ 高橋和己「孤立の慨愁を甘受す」(朝日ジャーナル11・10)「大学問題をめぐって連続ティーチン」での講演

▼ 京大新聞「四一〇—四二二。師岡佑行・井上清の発言も収載」

▼ 京大教官共闘会議準備会「学生部封鎖とその(実力解除)をめぐる京都大学の行動について。」

▼ 池田浩士「闘争の底辺から底辺の闘争へ」(情況臨増)

▼ 村尾行一「東大共闘—この奇妙なる生態系」情況臨増

▼ 東大問題の核心(世界①)堀米康三、岡谷三喜男、大塚久雄、務台理作、石田雄等。(共通した論旨(近代化論))

▼ 全共闘の自己否定と大学解体の提起を、思想的にとらえかえすことに失敗し、知識人の虚像と実体をばく露するだけでなく退廃を現出した)

▼ 原卓也「君は敵だったのか」(朝日ジャーナル11・10)

▼ 「大学再建」会田・梅原・江藤・岡谷・向坂・中野(新潮社刊)

▼ 「大学の自治と東大問題」(世界②)大内兵衛・有倉遼吉・小田実・吉野源

三郎。

▼ 「東京大学はどうなるのか」ドキュメント東大一月一八・一九日(中央公論②)

▼ 竹内芳郎「大学闘争をどう受けとめるか」

▼ 北沢方邦「管理社会と革命」

▼ 松田道雄「永久暴力の論理」(以上展望⑤)

▼ 吉本隆明・松原新一対談「現代における思想と実践」(群像⑤)

▼ 折原浩一「福田敏一教授の論文を読んで」(朝日ジャーナル11・13)世男四月号に掲載された福田敏一の「東大紛争と大学問題」への反論。福田教授における知的退廃、福田教授における人間の退廃、(暴力)の意味を論述。氏は研究者として自己の学問的方法、実践の検証を「ゲバルトをこえること自体をとおして」論じている。

▼ 法学者の立場からの。発言。「大学の自治と学生」ジュリスト四二〇。大学の自治と学生他資料「大学制度の改革案」他

▼ 加藤一郎「七学部代表団との確認書」の解説(東大出版会)

▼ 師岡佑行「立命館方式の成立と破綻」(情況臨増)

▼ 松下昇「権力を持たない者は空間をもつことが出来る」(情況臨増)「表現の变革と機構解体」(読書新聞一五〇)

〇)

▼ 竹田良知「学問論」(情況臨増)「山本義隆氏への其惑と疑問」(読書人七六四)

▼ 野村修「暴力論—権力と反権力の対話」(現代の眼④)

▼ 高野澄「立命館民主主義の断罪」(現代の眼④)

▼ 井上清「東大闘争の本質と新しき知性」(現代の眼③)

▼ 佐藤司「国家権力と大学の自治」(現代の眼③)

▼ 武谷三男「学生のつきつける問題」(現代の眼②)

▼ 藤本進治「政治の論理と演劇の論理」(テアトロ④)「今日の大衆闘争の根源性は自分の存在の根拠と対立し、またこの対立を媒介できる指導の質を要えることによって、直接闘争、根拠との闘争、前衛的闘争という三つの闘争のあいだの形態変化を可能とする、三つの形態変化を含む全体的運動とすることを求めてやまないものである—というのが藤本の論理で、本筋を衝いている。

▼ 吉本隆明「大学共同幻想論」(情況③)「収拾の論理と思想の論理」(文芸③)

▼ 新島淳良「大学コミュニケーションのために」(情況④)

▼ 梅本克己「東大紛争壊滅が訴えるもの」

「(展望③)

▼ 羽仁五郎「占拠の論理—全関西講演集」(関大生協編)「表現の自由と占拠の論理」(現代の眼④)「東大闘争肯定の論理」(話の特集④)

▼ 「反大学の思想」清宮誠、福富節男(情況臨増・④)清水多吉・小俣昌造・滝田修(情況④)

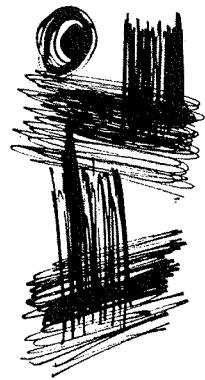
▼ 清水多吉「大学占拠と文化」(情況③)

特集・学園闘争とわれわれ

我々は現在、学園闘争についての考察をせまられている。それは、決して、主観的、客観的な関係・関連ではなく、第一に、学園闘争が全国的に誘発せざるを得ない必然性、第二に、全共闘運動という新しい運動形態をもって進展する現段階の大衆運動の特異性として考察しなければならない。現在の闘争はあらゆる側面からの告発をもって開始されているのである。確かに、現在の「告発」が、何にむかっているのかいまだ大衆的、全人民的ではない過渡期の特殊性を生んでいる。しかし、我々は、その「特殊性」故に現在の諸作業を一瞥するわけにはいかない。その「特殊性」を「権力」の名の下に、抑圧し、押し込めようとする風潮にも、我々は、深い噴りを覚える。

だが、我々が、現在、断言しえることは、どの様な関係の中でこの「事実」を歴史的、論理的に位置づけるのかの作業を不断に継続することである。ここに掲載する「京大全共闘」から「よびかけ」の意味もそこにある。なお投稿文である「歴史と自己の出発点」は現在の状況の中での卒業生の見解であることとを付記しておく。

(編集局)



全共闘バリケードを構築せよ！

〈反大学＝全共闘〉旅団を、
千里山全域に解き放て！

滝 田 修 (京大全共闘)

関西大学の先進的学友諸君！
関西大学Ⅱ戦線に新しく加わった新入生Ⅱ戦士諸君！

われわれ京大全共闘は、なによりもまず、諸君に対して、心から、連帯の挨拶を送りたい。

関西大学に、バリケードを構築せよ！
関西大学に、全共闘を登場させよ！
バリケード全館封鎖の貫徹で、関西大学の秩序を破壊し、大学キャンパスを全共闘Ⅱ学生権力の手に奪還せよ！

闘う全共闘のヘゲモニーで、万国博Ⅱ日本国ヘゲモニーを圧倒し、吹田・千里山全域を支配せよ！

――挨拶は終った。われわれは挨拶の内実を展開せねばならない。

わたしはかつて次のように主張した、
A二つ・三つ・そして数多くの東大Ⅱ日大をつくりだすこと、これが、学生運動の任務だ！と。しかし、69年初頭、東大安田城の最後の攻防戦が軍事的には玉砕の敗北を喫しながらも、同時に、むしろそのことによって、巨大な政治的階級の勝利を遂げ、この勝利を、全国各個別大学における同時的継起的な・同質的な烽火として、物質的に表現して以来、全国学生運動のテーマは、潜在的にはあるが、明確にA質的飛躍Vをはらみつつあった。すなわち、A二つ・三つ・そして数多くの東大Ⅱ日大をつくりだすだけでは、決定的に不十分だ、更にそれを

超えて、数多くの全共闘を結合すること、これが、学生運動の現在の任務なのだV。いまや、全国各個別全共闘は点的烽火の次元から線の結合の次元へと経過しつつある。それは、外的条件から強制されているだけではなく、闘う主体の内的欲求であり、したがって、闘争の必然である。そしてわれわれの闘いのシンボルとなっているところのバリケードの質も、内向的・消極的・防衛的なバリケードから、むしろ外へ向って自己を開示し自らの力量を解き放つところの攻撃的・秩序解体的なバリケードと推転・向上しつつある。

こうした運動テーマの推転とバリケードの内実の向上は、どのような条件のもとで起っているのだろうか、われわれ全共闘派の過去の蓄積を検討しておかなければならない。

A東大闘争Vの一年間は、学生・研究者が、自らの欺瞞的被害者意識を破壊し、自己を秩序の共犯的加害者として確定し、そうした自己の質を不断に否定してゆく自己否定運動としてあった。それは、A大学Ⅱ共犯者加害者V論を最大公約数とするところの小ブル革命派の局限的意識形態のA外化Vとしてあったし、更にいえば、A共産主義の学校Vとしての全国学園闘争とそれを闘うA強力な個人Vの必要をA予感Vするものとしてあった。東大安田城最後の攻防戦は、自ら

の外化である自己否定運動を止揚し、自らを玉砕することによってのみ製造した無数の石ツブテを全国にばらまき、かくて全国的な規模で巨大な大衆的エネルギーのA流動と噴出Vを形成し、そのただかにA秩序Vを引きつりこみ、A共産主義VとA暴力Vの問題を、主体的Ⅱ客観的条件として、つまり現実性として、端的に提起し、自らをA革命の現実性Vの側へ押しやり、A革命の現実性Vへの一歩接近を告知したのであった。そして、東大闘争と同時的にあるいは継起的に噴出した各大学全共闘の闘いであることよって、A東大が登りつめた地点

Ⅱ安田城を踏え、その地点から出発することVを現実から要請されていたのである、したがって、この現実の要請のために、闘争のテンポは、極めて一挙的・飛躍的にならざるをえなかったし、闘争の内実も、最初から一気に理念抽象的な性格をもたざるをえなかったし、またそのゆえにこそ、それぞれの全共闘Ⅱ内部では、強力なセクトの牽引Ⅱ指導性が不可避のものとなり、ここに、各セクトと反民青ラディカルズとノンセクト・ラディカルズとの間の吸引と反挑のA関係Vが、闘争主体のA戦線的結合Ⅱ大衆的結合Vが、革命的に糾合させるべき火急性能をもって問われたのであり、更にいえば、このA戦線的結合Ⅱ大衆的結合Vは、すでに、先駆的Ⅱ根源的に、日大全

共闘によって、かの古田暴力団≠國家権力機動隊の反革命暴力に対して鋭角的な突出した闘いを続けてきた日大全共闘によって、先取されていたのである。

したがって、われわれ全共闘派の闘争の過去と現在を総括的に点検し、未来を勝利的に展望しようとするとき、はっきりしていることは、個別東大闘争の生産物と個別日大闘争の生産物とを加合しなければならぬということ、そしてこの加合によって、△それぞれの全共闘▽存在構造を止揚し、戦闘の先進的な学生大衆の全国戦線≠全国全共闘評議会を物質化しなければならぬということ、つまり個別全共闘の闘いを全国全共闘評議会として、全国ソヴェト運動の一環として、集約し、かつ後者によって前者を規定し牽引しなければならぬということ、この現実の任務に於いては、われわれは、個別学闘闘争△すら▽闘い得ず、いわんや、個別学闘闘争の深化とその全国権力闘争への物質的向上を貫徹しえず、権力・ブルジョアジーの総力戦的対応(学園ロックアウト戦術・実力闘争の最初の一挙の圧殺・カンパニア行動さえ封殺等)の前に屈服してゆかざるをえないということ、これである。

われわれ京大共闘は、以上に見てきた現実の諸条件に規定されたところの末来からの要請——全共闘の全国化とその物質的表現としての全国全共闘評議会の

結成——に於て、一挙に、三・一≠三・三「入試粉砕」闘争へと突出していった。われわれの政治スローガンは、次の三本から成り立っていた、すなわち、① 帝國主義支配を支える入試制度を粉砕し、國家権力による入試全面統制に対決せよ、② 闘争破壊策動としての京大入試粉砕、③ 全国入試粉砕闘争の一環としての京大入試粉砕、である。

われわれは、三・一闘争において、秩序の番人≠日本共産党・民青の入党派闘争の個別ブルジョア政治としての「入試実現京都五万人集会」を、全国共闘の動員≠全国プロレタリア政治の貫徹によって破壊し、更に権力をわれわれのゲバ棒と投石の前面にひき出し、これを東大路に撃退させ、かつ夜を徹して、警察権力と対峙して大衆武装街頭闘争を闘い、抜き、この闘いの質を、大阪の塩水港精糖の暴力闘争に飛火させた。われわれは、大学占拠≠街頭占拠≠工場占拠の同時性・同質性を、物質的・大衆的に、闘い得ることによって、あるいは同じことであるが、来るべき総力包圍戦を主体的に準備するところの八陣地戦≠街頭機動戦の同時性・同質性▽を現実のものとするこゝとによって、まさにこのこととして、大学闘争が決して大学生のみの闘いではありえず、帝國主義市民社会をも同時に巻き込んだ全人民的な闘いの質をもたらさずにはえないことを示し、かつこの同

時的同質的な結合のパターンを、70年闘争のパターンとして、萌芽的に、示したのであった。しかし、全体としてみると、京大入試粉砕闘争は、その階級的任務の重さのゆえに、軍事的にはとくに、十全には貫徹しえず、権力≠当局≠ブルジョアジーの圧倒的決意によって、なしくずされ、かくして京大全共闘は、一度は、ほぼ瓦解したのであった。それは、われわれにとって避け得ない必然であった。なぜなら、この闘いを闘い切るためには、次の四点が、すなわち、① 反日共・反権力の鉄の意志統一、②、③を内

実とした大衆の部隊的団結と戦闘的大衆武装、④ △個別▽全共闘を質的に超えるところの全国性(全国全共闘評議会の必要)、⑤ 個別△学園▽闘争の質を止揚するところの全人民性、の四点が、なんとしても必須の主体的条件であったのであり、われわれの全共闘が一時的に瓦解せざるをえなかったのは、とりわけこの瓦解が必然であったのは、以上の四つの主体的条件の未成熟≠未形成で規定されていたからである。そして、こうした主体的条件の未成熟≠未形成が、われわれの瓦解の必然性を規定していたとするなら、まさにそうである以上、われわれの京大全共闘の再建(——われわれは、新入生を戦士としてバリエード解放区の中に迎え入れ、自らの再建と強化、永遠の増殖に動起しつつある——)も、当然

のことながら、この四つの主体的条件の形成を現実的に推進してゆかないかぎり、こうした形成を可能に必然にするところの△闘いの中の結合▽を準備してゆかないのであり、真に再建となることはできないのである。

かくして、われわれは提起する、△闘いの中の結合≠反日共反権力闘争を闘う戦闘的大衆の全国的全人民的部隊的結合▽を、全国全共闘運動の戦線形成によって、また反学運動の始動によって、実現しなければならぬ、と。自らの主体的形成を階級形成として展開せよ。個別学闘闘争が個別学園の枠内で全学化するだけに終り部分の改良闘争として(≠学園共同体変革運動として) 終わった段階は、急速に過去のものとなった。それぞれの全共闘が全国化の展望を盲目的に手探りで模索した時代は、過去のものとなった。現在問題になっているのは、現在の大学秩序≠帝國主義の帝國主義・民主主義大学・エセ民主主義の帝國主義大学などの如何を問わず、現在の大学は、帝國主義ブルジョアジーによって管理された労働力商品製造工場≠階級大学としてある、——を攪乱し、その機能をマヒさせ、その存在それ自体を破壊するのかどうかということ、われわれ流の「下からの」大学解体を追求するかの権力による「上からの」解体・日共民青≠教授会当局による「中からの」解体を許

すのかどうかということ、つまり大学解体という歴史の大事業にわれわれのA階級性Vを貫徹するのかどうかということ、これである。われわれは、第一に、われわれの大学解体路線を貫徹するために、自らの主体形成II学生権力の形成を、全国化の展望のもとに急がねばならないし、また第二に、全人民的団結による階級大学解体事業の勝利のために、このA自らの主体形成II学生権力の形成VをA階級形成II反帝統一戦線の形成Vとして展開しなければならぬのである。全国高校生評議会・全国労働者評議会・全国朝鮮人評議会・全国部落民評議会等を、反帝戦線を担う部隊として、左派的にひきだす事業、これが、反帝統一戦線の形成の事業であり、プロレタリア階級の権力として自己形成の闘いであるとするれば、この階級形成を、先駆的かつ献身的かつ英雄的に貫徹してゆく部隊として、全国全共闘II学生権力は、登場せねばならぬ。全人民的団結II階級形成の先駆的・献身的、英雄的な工作者としての全共闘運動の、この一面を、われわれは、反大学運動として提起しよう。

あるいは同じことだが、反帝統一戦線における全共闘II学生権力の位置と任務を物的に表現するものとして、われわれは、反大学運動を提起しようとしている。革命闘争における主体的力量の不均衡発展は、その歴史的・社会的諸条件か

ら、一定の部分に対して、必ず、戦闘の全国化全人民化と戦闘の階級の根源性を保証するという革命戦争上の任務を押しつけるのであり、更にしたがって、この部分に対しては、他のすべての部分を凌駕する英雄性、II自らの犠牲において他の部分の力量の革命的成熟を激発しなければならぬという英雄性)を先駆的に要求するのである。

このように革命運動そのものの性格からA一定部分Vに対して要請されてくるところのA逆倒されたプロレタリア英雄主義Vともいうべきものを受けとめ担ってゆくべき戦士として、日本学生運動は存在してきたし、現在の全共闘運動も、将来的に巨大な勢いで吹き荒れるであろうところの学生権力の嵐も、まさに、そのような部隊としてあるであろう。

われわれ全共闘は、こうしたA逆倒されたプロレタリア英雄主義Vを貫徹するところの階級形成の工作者として、帝国内主義市民社会のあらゆる領域に部隊をなして出沒し、敵のあらゆる戦線を撃破し、敵階級の帝國主義市民社会へゲモノー(II帝國主義社会・資本主義社会・市民社会などの概念区分に明け暮れるベグンチスト・インチケゲンツィアのさる頭は、最早、問題にならない)を解体し、自らのプロレタリア・ヘゲモニーを植付け、培養し、増殖してゆかなければ

ならない。われわれ全共闘は、すでに触れたように、この一面を、反大学運動として、解き放たなければならない。閉じられた内面を深化するだけではなくて、自らの内面から出立しながらも、かつ、自らを外へ向って解き放ち、かくして対象化した自己の力量を自己否定的に止揚することによって、自らを多様化し全面化し、強化する道を、われわれは、歩まなければならない。69年70年、そして70年代闘争を闘う組織II運動方針として、われわれ東大全共闘は、A全共闘II反大学V運動の始動・全面展開を提起する所

以は、一つには、ここにあるといわねばならない。

しかし、われわれのA全共闘II反大学V運動が、大学闘争から出立し階級闘争一般の中に自己を対象化し更にこの自己の對象化を否定的に奪還するような仕方ですら、大学の闘いそのものを真に根絶的な闘いとしなければならないことは自明である。大学の闘いを闘いとするためには、闘いが自らの闘いの生産物を永続的に自己否定しかつ持続する条件をもたなければならない、まさにそのためにこそ、真に根源的な大学批判が、ブルジョア大学の現実そのものの批判(II大学存在そのもののブルジョア性の批判、大学の学問・教育・管理の三位一体的ブルジョア性の批判、これを物質的におしす

ずめる大学秩序II大学機能の擾乱と破壊、学生権力による大学管理闘争)が、A全共闘II反大学V運動の始動によって、現実のものとならなければならない。すなわち、階級闘争一般ではなくて、階級闘争の特殊な形態としての大学闘争のこの特殊な条件(II大学の闘いであるという条件)を検討してみても、この特殊が特殊にとどまりえず、普遍に、つまり階級闘争II階級形成の闘いへと、自らを止揚しないではおかないということ、このことを、われわれは、明らかにしておかなければならない。反大学運動を文化運動(一般へと右翼的に解消しブルジョア的に特殊化してしまうことが、許されないとするならば、そして反大学運動がただに反大学運動一般ではなくて反大学II全共闘V運動であらねばならないとするならば、この反大学運動の原理は、やはり一つには(IIただ単に階級闘争の必要から、いわば外面に提起されるのではなくて)、大学存在・大学機能に対する根底的内在的批判の中から、文化運動(学問および教育、政治に対する文化)の批判的総括として、文化運動の自己止揚として、成功的に提起される必要があるのである。結論的にいえば、A文化革命と政治革命との同時性の追求Vとして、A反大学II全共闘V運動が提起されなければならないのである。

詳しい展開は紙数の制約でなさない

(詳しくは京大共闘機関紙STRUGGLEを参考せよ)が、――ブルジョアジーの支配は人間に対する物の支配の固定の維持・強化・拡大再生産としてある。△現存する存在領域・生産過程△現実そのもの△現実の実践△肉体労働△生産的実践を軸とした人間実践の総体△としてある△物の世界△意識・感性・理論として疎外された△人間主体の世界△から分離して自己運動し、この自己運動する△物の世界△が人間主体を不断にかつ永遠に△人間の世界△を圧殺し併呑し続けるということか、彼らの支配の条件なのであり、したがって、この△物の世界△に対して、△現実そのもの△Vに對して、人間主体が、反逆し、自己を指定し、かくして、△物の世界△現実そのものVと△結合△し、△関係△し、この結合関係のなかで、自己を对象的かつ主体的に△展開△しようとすることは、ブルジョアジーにとって、支配秩序の根底的危機なのである。だから彼らは、彼らの全ヘゲモニーをあげて、大衆の対象的かつ主体的な自己指定の運動を圧殺しようとするのである。彼らのこうした圧殺行為はいわゆる△階級解体V政策として具体的に系統化されて現われてくるのだが、ブルジョア支配の重要拠点としての大学のブルジョア支配も、この支配原理の貫徹としてあるのである。すなわち、大学機能のブルジョア性は、――学生大

衆が自ら思考し自ら感性し自ら学問し自ら教育し自ら行動し自ら点検し自ら批判し自ら管理する能力、つまり、自己学問能力・自己教育能力・自己行動能力・自己点検能力・自己批判能力・自己行動能力の萌芽と展開を圧殺し、大衆を私的商晶所有者へと解体・去勢することを基本としているのであり、彼らブルジョアジーの大学秩序が、このように、大学の学問△教育△管理のブルジョアの三位一体性を保証する物質的体制としてある以上、われわれは、こうした大学機能の全体を△物質的に△攪乱△し△させねばならず、そのためには、大学機能(学問・教育・管理)のブルジョアの三位一体制のド真中にクサビを打込まなければならぬのである。そしてこの△ド真中△の環こそ、△精神労働と肉体労働の分離Vであり、△精神労働△人間主体の理論する意識・感性する意識と現存する存在領域・生産過程△現実そのもの△物の世界△現実の実践△肉体労働との分離Vであり、同じことの別の表現におきながら、現実そのものの切捨て、両者の結合関係の欠落である。したがって、われわれは、この△現実の実践△現実そのもの△物の世界△を、復権し、かつ彼らの大学秩序の只中に投げ込み、それとの結合関係を展開することによって、敵の支配原理を逆転せしめ、人間を物的主体的に解放しなければならぬのである。

しかし、こうしたわれわれの闘いは、決してキレイゴトではすまされない。それは、口先だけの理屈で終ることができない。それは、不可避的にも、真赤な血によって購われなければならないところの闘いである。なぜなら、われわれの闘いは、△現実の実践△現実そのもの△物の世界△との結合関係を展開する闘いであり、したがって、現実△現実の実践△現実そのもの△物の世界△として存在し、現実そのもの△物の世界△と存在し、しかも、この結合が敵の秩序の根幹にふれるのだから、結合は、結合一般でなく、闘いの中の結合以外でありえず、秩序の中の結合を破壊する結合とならなければならないからである。すでに述べたところでいえば、それは、△反日共反権力闘争を闘う戦闘的大衆の全人的全人的のである。以上大急ぎではあったが、大学闘争の内在的批判の解明からも、われわれの闘いが、△反大学△全共闘△運動でなければならないこと、まさにそのようなものとして反帝統一戦線の先駆的核心を形成するものでなければならないこと、要するに、階級形成として自己の主体形成を貫徹しなければならないことが、明らかになった。

われわれの闘いは、反△大学△というひとつの制度を求めるものではない。われわれは、反△大学△運動Vを、つまりひとつの運動を追求しようとしている。それは、決して、自足的△停止的な空間△時間ではありえないのであって、攻撃につく攻撃として、行動につく行動として、貧窮を不断の流れながら、増殖し不断に再生産するものでならない。だから、われわれは、これらの一切を保障するものとして、反△大学△運動の中核を、クラス行動隊△工作隊に設定し、この部隊によって、現実そのものの復権とそれへの投入を貫徹しようとしているのである。

具体的な講座の内実を語る余裕はまったくないが、われわれのカリキュラムを提示するならば、次の五つのブロックに分れる。A.部落問題・万博問題・沖縄問題・朝鮮問題(朝鮮語)・中国問題(中国語)・B.労働経済・教育問題(高校生)・法律問題、C.マスコミ批判・歴史学批判・哲学批判・文学批判・自然科学批判・経済学批判・政治学批判(国際共産主義運動論、D.国際共産主義運動の展開)として、英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語、E.戦争論(武器論および実技を含む)、以上の五つのブロックの間で、またそれぞれの講座の間で、現実そのもの△現実の実践△との結合の仕方、その形態と内実には、おのずから量的な差異が生じて来てもであろうが、基本的な質については、すでに展開してきたところを貫徹しようであらうし、またしなけれ

ばならない。

たとえば、Aブロックは、明確に、ナショナリズムの問題(自らの内なる日本)日本国日本民族を闘うこと、民族と階級)の問題に闘っており、いずれも、クラス行動隊による現実への切り込みが要請されている。万博問題は、とりわけ関大の先進的学友諸君によって、最初の扱われるべき課題である。敵のスロガンが、各国の労働者・資本家よ、団結せよ、自らの国家を誇示し、万国に敵対せよ、ということにある(彼らの調和階級協調)のに対し、われわれは、万国の労働者よ、団結せよ、というインターナショナルの原理を実体的に形成し対置してゆかなければならないのである。Bブロックで、たとえば、労働経済の講座をとりだして考えるなら、こんな風にも問題はあつた。京大闘争とまったく同時に一月以降、大阪の塩水港精糖で業界資本の企業系列合理化(企業合併を準備する工場ロックアウト)に対する闘争が始まり、京大入試粉砕(二・一三・三闘争)を闘つた労働者学生によって、三・一三三・三闘争とはほぼ同時的性質的に実力闘争が闘われた。この塩水港資本に対する闘い・同盟組合執行部に対する闘いを学園闘争を闘う学生がどのように結合して闘うか。また、一月以降の京大闘争を階級的視点から自分の問題として闘つてきた一人の中小企業(文英堂)の

労働者が、まず日共組合から除籍され、次に資本の処分に出くわし、現在、これをハネ返す闘いが地域労働者によって、共闘的に闘われておる。またその同じ地域で、日本クロスの臨時工の大量首切り問題が起り、しかもこれを闘おうとした日本共産党員・民青同盟員が、党内から除名されるという事態が生じている。資本当局(秩序の主人)と日共・同盟(秩序の番人)と城内の平和ブロックが進んでいる。これをどう解体するか。問題は大きくかつ深い。更にCブロックは、いわゆる批判学としてあるが、このブロックでは、ブルジョア学批判的継承がはかられるであろうし、Dブロックは、語学をインターナショナル主義の観点から位置づけようとするものであり、C||D

ブロックはともに、秩序の主人や番人の世話にならずに、自らの力で学問する力量を培養しようとするものであり、最後にEの戦争論は、現下の暴力闘争の必要からその説明が要請されていることに對する対応である。

では最後に、現在の萌芽しつつある反大学運動の原理を、以上の展開のなかからまとめて、テーゼ化しよう。

① 大学秩序の攻撃的解体者・根底的破壊者としての反大学。彼らの「大学」を粉砕せよ!

② 大学機能の物質的攪乱者としての反大学。彼らの「大学」・彼らの「学問」

・彼らの「教育」・彼らの「管理」・彼らの一切を解体せよ!

③ 肉体労働と精神労働との分裂を止揚する反大学。現実の実践||現実そのものを復権せよ!

④ 闘いの中の結合||反日共反権力闘争を闘う戦闘的大衆の全国的全人民的部隊的結合、を形成する反大学。見えざる敵を打倒せよ!

⑤ 反帝統一戦線の先駆的核心としての反大学。線から面へ、プロレタリアへゲモニーを拡大せよ!

⑥ 貧慾な流れとして不断に進撃を続ける反大学。クラス行動隊を組織せよ!

⑦ 文化革命と政治革命との同時性を追求する反大学。多様な細流を巨大な一本の流れに集結し、解き放て!

すべての戦闘的な関大生の諸君、われわれは諸君とともに、既に、永続的解放戦争の緒についている。われわれは八闘いの中の結合Vを呼びかける。△反大学||全共闘V運動に結集し、自己の全力量を解き放て! △反大学||全共闘V旅団の機動力で、敵の陣地を、かきまわせ!

自己否定の論理

花房勝治

一 歴史の論理Ⅱ暴力支配

歴史のメカニズムは自己の主観的願望とは全く別物なのであり、全く逆なものとして展開される。それ故、歴史はわれわれを徹底的に疎外し、われわれの関知しないところで歴史的方向性が決定され、われわれの主体を抹殺する形態で進行する。われわれがそうした歴史のメカニズムに無力であればある程、より益々われわれの主観的願望とは正反対の方向に、即ち、歴史のメカニズムの一部分品として強制的に仕上げられるのである。歴史のメカニズムが一つの極限状況（例えば戦争）に到達したとき、われわれは自己自身が絶望的な歴史の歯車的一部分品に完全になりさがっていることに気づく。そして、われわれは最後の歴史のメカニズムと心中自殺を余儀なく強制される。

それ故、これまでの歴史支配の論理は

暴力支配であったし、現在もそうである。「ブルジョア国家の全体が暴力の上に立っていることはその軍事組織を見るだけで、いやでも明らか」であろう。われわれが現社会体制を根底から否定する実践運動に突入した時、歴史支配の本質が暴力以外の何ものでもないということが把握できる。勿論、支配階級は暴力を合法化する。暴力を合法化する場所として国会（議会）が必要なのである。議会制度とは暴力を合法化し、暴力を隠蔽した民主主義という幻想で合法的に人民を抑圧する機関なのである。それ故、「ブルジョア合法性として現出しているものは、問答無用の義務的規範にまで高められた、支配階級の暴力にはかならずみのである。だから支配階級にとって民主主義とか議会制度とか法律とかその他マスコミの中立等々は支配階級の暴力支配を隠蔽する為のヴェールである。これまで

の歴史支配がその本質上暴力支配であったし、現在もそうであるということをも十分に認識しておくことは絶対必要である。だから、われわれが現社会体制を否定しようとする時、国家権力Ⅱその具體的姿としての機動隊及び軍隊との対決は避けられないものとして存在する。国家権力Ⅱ機動隊との衝突を回避しては如何なる社会的変革もあり得ないことを認識すべきである。

二 社会に対する根底的批判

では、何故に歴史のメカニズムはわれわれの主観的願望とは全く正反対のものであり、その支配は暴力を本質とするのであるか。それは「すべてのこれまでの社会の歴史は階級闘争の歴史である」という本質の中に存在する。支配階級と被支配階級、抑圧階級と被抑圧階級、莫大な武力をもった階級とその武力に支配される階級との分裂した社会体制にその根源を持つ。資本主義社会は階級分割の最も単純に明白に完成された社会体制なのである。それ故、資本主義社会は私有財産を基礎に全人民の生命的基盤を一部資本家が独占し、人民支配の為の暴力を独占し、さらに法律、文化、教育等の一切を独占しつつブルジョアの合法性でもって人民を資本のメカニズムの一部分品

として完成させる。如何なる民主的ヴェールにつつまれていようと「近代的な国家権力は、ブルジョア階級全体の共同事務を処理する委員会にはかならない」のである。近代的国家権力を基礎づけるのは資本の論理であり、それは人間を冷酷に支配していく。資本の論理は人間とは無関係に、それどころか人間を徹底的に疎外しつつ、人間の関知しない所で歴史の運命を暴力的に決定していく。それ故、必然的に人間は資本を所有する階級と資本と搾取される階級とに分断されながら資本の奴隷になる。

資本の論理の当然の帰結としての資本主義社会の歴史的価値観は形成される。即ち、資本にとって有用である時にも人間は価値を持つのである。だからわれわれは生れ落ちるや否や、ものとして資本の論理が貫徹する市場組織のなかに組み込まれる。そして高価なものとして訓練を受け、自分自身を商品とし、自分をものとして有利に投資すべき資本として体験する。この投資がうまくゆけば成功者として人生価値を持ち、失敗すれば敗残者として人生の価値は失われるのである。だから学校（特に大学）とは自己を高価な商品として訓練し、有利な資本として投資するための訓練場であり、他方、資本を有効に管理し、資本を護護する為のイデオロギーの生産の場所にすぎないのである。資本の暴力的支配の前に

真理も平和も眞の人間も存在しないのであり、真理探究の場としての大学は存在しないのである。

三 自己否定から 社会否定へ

人間は資本の前にも、ものとしての意味しか持たず、大学は資本を積極的に支える役割しか果たえないのが資本主義社会の本質である。

それ故、大学の産学、軍学、官学協同の本質は資本の前では当然のことである。むしろ、産学、軍学、官学協同路線そのものが大学の存立基盤であると規定するのが正しいだろう。勿論、大学の講義の中でマルクス主義の講座が許されているのも事実である。しかし、それ自身、マルクス主義講座を許さざるを得ない客観状況が存在するからであり、他方マルクス主義講座を体制イデオロギーの安全弁とすることにのみ許されているのである。(勿論、本来の意味でのマルクス主義ではないことは明白である)。

われわれはこれまでこのように存在し続けた資本主義社会及び大学の犠牲者として自己を位置づけ、これらに抗議してきた。しかし、われわれは単なる犠牲者なのだろうか。この間の東大、日大闘争が明白してきたものはわれわれは自己

自身とプロタリアートに対する加害者なのであり、資本の擁護者であったという事実を明白に提出した。自己の存在基盤そのものが加害者として成立しているし、現在の自己の存在基盤はまさに資本の論理そのものである。われわれが被害者意識から加害者意識に転化した時、そ

る、我々は根底的な自己否定に転化する。自己の根底的否定は自己の存在基盤の否定、即ち資本の論理の否定なのである。具体的には資本の論理の貫徹によってのみ成立している大学そのものの否定ということになる。それ故、現在の革命的学園闘争は普遍的性格を持つのである。これを実践面から把握すればこれまでのブルジョアの日常性の否定、即ち学園封鎖による資本の論理に支えられた学問、試験の拒否である。そうした徹底的否定は必然的に卒業式粉砕、入試粉砕、入学式粉砕等々となる。

このようにブルジョアジーの根底的基盤である資本の論理を普遍的、根源的に拒否するが故に、国家権力はわれわれに全てのウェールをはき捨てて最大限の暴力でもって襲いかかってくるのである。しかも、この自己否定から資本主義社会の否定への論理は学生のみに限ったことではなく労働者、市民、農民等全人民を包摂するが故に支配級にとっては最大の危機なのである。支配階級がもがきつつ

彼等の本質を全人民の前に暴露すればする程われわれは現代社会の根底的否定へ志向さざるを得ない。そして、しかも支配階級の暴力装置そのものを根底的に否定(打破)してゆかなければわれわれの勝利も保証されないことは確実だ。

四 根源的否定⇨創造

ブルジョア社会を根底的に否定し、廃棄するまでわれわれの主体的創造性を実現することは可能である。何故ならば資本の論理の上にとんだ創造性を実現しようとも(不可能なことだが)結局、空想論に過ぎないからである。さらに空想論(ユートピア)は単に無意味であるばかりでなく現実の革命運動を麻痺させるからである。ユートピアは現実の革命運動に絶望し、そこから逃避する為の一つの論理であり、あるいは、現実の運動及び客観的事実の認識の無知からくる論理なのだ。

むしろ、現実に果せられているわれわれの任務は現代社会の根源的否定への創造である。否定の創造性こそが現実的に必要なのだ。否定の創造性とは現代社会を止揚してゆくところの出発点である。別の言葉で言えば主体的に革命的運動に参加することである。現代社会の否定こそわれわれの創造の出発点とせねばならない。それは常に客体と主体の緊張

関係の中で闘争参加者一人一人が自己を点検し、否定し、内的苦悩の中から新しい自己を創造していく闘いであるし、権力に対する非妥協的闘争として実現していくものである。

歴史の論理としての暴力支配と、それを基礎づける資本の論理、それを担うブルジョアジーを打倒する非妥協的闘いのみがわれわれの主体的創造を保証するものとなるであろう。

革命運動—それは、全社会階層の総和の意識として具現するものである。その「総和」の意識をいかに全階層の領導母体が政策として具現化していくかがその「革命」の可否となる。現体制が、その体制を永続化させていくとは現実には不可能である。それは歴史が教えている。現在、日本において社会的変動が日本的暴力の下に再編体制として策謀されている。侵略と抑圧に迎合するの、拒否し労働者政府を設立するのかが断絶に問われている時代に入らつつある。その現代の時代を、われわれが、歴史的過程の検証の中でわれわれの作業そのものについて点検を絶えずまた要求されていることも事実である。ここに、ドイツ革命の総括としての一素材を紹介する。

一九一八年二月革命

△民主派のプチ・ブルジョアは、革命をできるだけ早く終結させようとする。これにたいして、革命を永続化させて、多かれ少かれ財産をもつ階級のすべてを支配の座から駆逐してゆくことこそ、われわれの関心事であり、われわれの課題である。▽

マルクス／エンゲルス△共産主義者同盟へのアピール▽一八五〇

歴史の発展なり、事実なりについての判断をくだすさいには、表面的が多かれ少かれ偶然的な動因や現象と、より根底的で本来的な動因や原因や関連とを、つねに区別しなくてはならない。

革命党の欠如

一九一八年の十一月革命は、第一次帝國主義世界大戦と、ドイツ帝國主義の崩壊との結果であった。それは、革命党によつて計画的に準備されたものではなく、軍事上の壊滅から一軍の戦意喪失と、戦争の重荷を担いつづけることをのぞまない後背地の労働者大衆の不满から

トライキにつづいて、一九一七年四月には、食料の増配とプロイセン憲法の改定の約束とを要求するストライキの波がおこった。一九一七年七月には、艦隊で最初の水兵叛乱がおこったが、これは武力をもつて弾圧された。これらの一九一七年の諸運動には、ロシアの二月革命の影響がいちじるしい。

—自然発生的に展開したのである。しかし、革命が自然発生的な性格をおびたからといって、革命の準備過程に意識的、革命的な社会主義勢力が力を及ぼさなかつた、というわけではない。その逆であつて、革命前の運動や闘争を指導していたのは、戦前に労働者組織のなかで経験をつんでいた社会主義者たちであつた。

この運動の先頭に立つた人びとは、左派の革命的諸組織・諸グループと、多少とも密接な接触を保っていた。

カール・リープクネヒトの有罪判決に反対する一九一六年六月の政治的大衆ス

けでそのうちの五〇万を占めた。

闘争の主導権を握つたのは、ベルリンの金属工業の（労働組合執行部）反対派の職場活動家たちであり、かれらは、のちに八革命的活動家集団▽という組織をつくつた。

かれらは、ほとんど全員がUSPの黨員だったが、党指導部にたいしては独自の姿勢を保ち、この党の左派の中核をなしていた。オプロイテの特別の意義は、かれらがつねに工場労働者の気分を反映していた点にある。かれらの集団はレーテに似た構造をとっていたけれども、レーテのような大衆組織ではなかつた。だが他面、かれらに課せられた課題はレーテのそれを超えていた。かれらは、欠如していた革命的・共産主義的大衆政党を八代行▽したのである。かれらはこの役割を、一九一九年一月にいたるまで、保持しようとしてつづけた。

労働組合およびSPDの指導部は、この運動に面して八中立▽を宣言した。

プレーキをかけるために

先頭へ……

かれらは、ゼネストを抑えるために全力をあげたが、それに失敗すると、ストをつぶすためにストの先頭に立つた。当時のSPD議長エーベルトは、指導部の戦術を、一九一八年二月一七日の八ハン

ブルガー・エヒョーV紙にのせた論説で
こう説明している。

△運動への党指導部の参加は、ゼネストが秩序を保って進行し、理性的に終ることを保証するためには、やむをえないものだった……。われわれが党員諸君の圧力に無条件に追隨しはしなかったことは、従来の紙上から明らかだ。われわれはあらゆる形態で、われわれとはかわりなく始まったこの時宜に適さない運動の責任をとることを、拒否してきていたさらにわれわれは、ストの指導にたいして相当の影射勢力がわれわれにあたえられることを条件としてのみ、この運動に参加したのだV

後年(一九二四年)、大統領となったエーベルトが、一月ストライキを推進したとしてナシヨナリストから攻撃されたとき、かれらは名譽毀損の訴えをおこして、かれやシャイデマンやブラウンがストライキ指導部にはいなかったことを、つぶすためにほかならなかつたことを、法廷において立証した。SPDの政策をものがれるこのエピソードは、この党の倫理的・政治的頹廢の極致をしめしている。ここから見ても、これらの△社会主義者Vの裏切りは偶然でもなければ脱線でもなく、階級敵の陣営への系統的な投降であることがわかる。十一月革命におけるSPDの全政策は、基本的に、政治革命の場においてスト破りをはたらく

ことであつた。

ドイツ政府は、即刻、惨虐な手段でストライキに対抗した。二月二日、重戒敵令が施行され、即決裁判所が設置され、数千人の活動家が逮捕されたり、戦線へ送られたりした。こういう手段でストライキは圧殺された。二月三日、革命的オプロイテはベルリンのストライキを中止した。地方ではそれ以前に労働が再開されていた。

革命前の反階級闘争のサイクルはこれで閉じられたが、その十カ月後、労働者・兵士大衆の強力な立ちあがり、プロレタリア革命という新たなサイクルを導入した。

一九一八年の一月ストライキの弾圧は、命数のつきたミタリズムの最後のあがきだった。西部戦線で少々の戦果をあげたとはいふものの、八月には戦局は一転した。勝利による講和はもはや絶望的となり、なんとしてでも戦争をやめることが必要となつた。

上からの革命か？

休戦と講和にいたる前提条件をつくるため、軍の指導部は、政府に政治的圧力をかけた。△上からの革命Vによって、軍事的敗北の結果を肩代りさせる政府を、つくりあげようというわけである。この△国民政府Vの首相はマクス・フォン・バウデン太公だった。史上初め

て、二名の社会民主党指導者が入閣し、史上初めて、ドイツを議会制政府が△統治Vした。こういう△民主主義Vへの談歩の狙いは、ドイツを軍事的崩壊から、そしてこれに伴なう革命の爆発から、救うことであつた。譲歩は革命への橋になつてしまつた。最後の瞬間になされた部分的譲歩の数かず(選挙権の拡大や政治囚の恩赦など)や、そのほかの△民主化の措置Vも、この成りゆきを変えることはできなかった。不満をもち、飢、

戦争に疲れた大衆の圧力は強まる一方であり、加えて軍の規律はゆるんでいて、とくに国内でつて不順の戦闘者の圧迫を受けず、急迫化してゆく労働者大衆と身近に接触していた部隊では、そうだった。

このような政治的・軍事的瓦解の雰囲気のままに、キールの外洋艦隊は、十月三十日に△大作戦Vのために出港せよとの命令を受けた。この△決死の攻撃V計画は、水兵大衆に、公然たる叛乱のきっかけをあてた。造船労働者が、ただちにこの蜂起に合流した。労働者・兵士レーテが選出された。革命的な水兵たちは全国に散らばり、いたるところで革命の旗手となつた。

あらゆる革命において、特徴的なことに、水兵は顕著な役割りを演じている。技術上の要求から、水兵の大部分は熟練労働者から徴募されざるをえない。その

ために海軍では、陸軍でも以上に、政治的に啓蒙された組織労働者の比率が高くなる。水兵たちが提起した諸要求は運動の初期にはまだ社会主義的な内容をもつた。軍内部の上下関係の改革をめざして、被拘禁兵の釈放、食事委員会や苦情処理委員会の設置、敬礼義務の範囲の縮小などである。しかし、これらの諸要求が初歩的でないことは、△ヴァイマル共和国Vの歴史家アルトゥアール・ローゼンベルクが主張しているように、ドイツの単純さをあらわしているわけではない。それはむしろ、あらゆる革命の第一歩について特徴的なことである。革命は、その第一段階では、なお現状改革という枠のなかで運動し、直接の悪弊を除去すべくただたかものなのだ。

だが、これらの諸要求は、初歩的であるとはいへ、たちまちに既成のものに限界に迫り、それを越えようとするダイナミックな力をはらんでいる。大衆は急速に、これらの諸要求の限界性を認識するようになる。

労働者・兵士評議会

ドイツの政治的支配権力は、一週間とただちに崩壊した。権力は労働者・兵士レーテの手中に移った。けれども、この革命機関の政治的・階級的構成には大きな問題があつた。工場の労働者レーテの大部分が、政治的訓練をへた組織労働者

から成り立つたのに反して、兵士レーテには偶発的・小市民的な分子が圧倒的に多かった。

労働者レーテが、意識的にせよ無意識的にせよ、社会主義的要求を担ったにたいし、兵士レーテは、革命的政治的意志の表現としてのレーテをからませることに、一役買わされてしまう。

陸軍の内部では、労働者は、その人口数に比して数が少かった。大部分の労働者が軍需産業もしくは海軍に徴用されていたのによい、陸軍の主力は、都市小市民、および、とくに農民だった。政治的経験をもたない、この小市民の目標は、もっぱら戦争の終結であり、これに伴なつての復員だったから、支配階級自体が軍事的崩壊によつて講和への動きを余儀なくされると、兵士レーテの政治的発展は行きつまつた。軍の権力者と目立った戦争推進者とはひっこんでしまえば、兵士レーテにとっては、革命はかたづいたのである。かれらは、権力を握ったSPD指導者と自己を同一視し、この連中がインターナショナルを裏切り、一九一四年八月四日にイエスといひ、城内平和を結び、一月運動ではスト破りをはたらいたことを無視して、この連中をミリタリズムの対立者と見なし、じぶんらの「八勝利」と市民生活への復帰の願望とを保證する者たちと見なした。

後年のプロイセン首相オットー・プラー

ウンは、その著書「ヴァイマルからヒトラーまで」のなかで、後年のSPD議長オットー・ヴェルスが、政治的に無知な兵士レーテを革命的労働者の影響力からもぎはなし、労働者と対立させることに成功したことを、語っている、

「ハヴェルスは兵士レーテの代表者を選出させ、この連中とともに隊伍をくんでブッシュ・サーカス（第一回ベルリン労働者・兵士レーテ総会の議場）へ行進した。この教練がいかに必要であり、革命のその後の展開にかつていかに決定的であつたかは、やがて明らかとなつた。当時すでにUSPはいささか動揺して、とくにその左派は「スバルタキスト」(リープクネヒト、ルクセンブルク、メーリングらのグループ)にかなり接近していたから……ヴェルスの訓練した兵士レーテが決定的な意味をもつたのである」

ここに語られている集会は、十一月十日に行なわれ、人民委員政府を選出した。この政府は、八革命をできるだけ早く終らせることを目的として、十一月十二日、この政府の姿勢をよくあらわした布告を発した。この布告は革命にとつては吉なものだった。

「八士官が上官たる関係は不変である。兵士レーテの第一の義務は、無秩序や叛乱の発生を阻止することにある」

兵士レーテがこの布告を摩擦なく受け取っていた結果、兵士レーテはまったく無力

となった。数週間後には、復員のため、兵士レーテはあつてなきがごときものに堕してしまつた。それは、反革命につごうよく任務を終えたのである。

一九一八年の崩壊時には、SPDがブルジョア社会の最後の支柱であつた。軍は解体しつつあり、ブルジョア国家機構は機能しなくなつていた。しかしSPD指導者は、軍の崩壊と革命とを阻止するために全力をあげた。皇帝の退位をやむをえなくつてからでさえ、かれらは、なんとかして君主制を救おうとした。エーベルトが、ひいては革命を防止するために、皇帝の退位もやむをえない」と、どたんばになつて語つたことは、特徴的である。かれは、皇帝の息子のひとりを摂政にしようとして提案した。ようやく十一月七日にいたつて、SPDは、公然と皇帝の退位を要求した。だが、こういった態度ではもうどうにもならなかつた。運動を阻止するために幹部会からキールへ派遣されたノスケの努力にもかかわらず、革命は、都市から都市へと拡がつた。十一月九日には、ベルリンで大規模な大衆デモが行なわれ、マクス・フォン・パーデン政府は退陣して、エーベルトが首相のポストをひきつた。エーベルトは「フォーク・パーデンに、摂政になつてくれと頼み、そのさい、あの悪名たかいセリフを吐いた。」

「八わたしは革命を、罪を憎むように憎んでいます」

その一時間後、大衆デモの圧力に押されて、シャイデマンが国会のバルコニーから、共和国宣言を行なつた……

シャイデマンが、党の仲間たちの同意を俟たずにこの宣言を発したのは、カー・リープクネヒトがベルリンの王宮で「社会主義共和国」宣言を発したという知らせが、届いたからである。共和国宣言は、デモする労働者たちの大きな歓呼で迎えられた。

十一月九日

SPDは、革命を阻止するために全力をあげてきた。いまやなすべきことは、革命が社会主義革命に拡大するのを防止するため革命の主導権をとることだった。十月中および十一月初め、SPD指導部が政府の崩壊をくいじめようとして躍起になつていつた。革命派の指導部(革命的オプロイテとスバルタクス・プレント)は、ベルリン・プロレタリアートの革命的決起を準備していた。蜂起の形態および日時についての議論は、十月二十五日から十一月九日までつづいた。決定がのびのびになつた理由は、ひとつには、革命的オプロイテに決定的な(と同時にブレキとしての)影響力を及ぼしていたUSP中央派指導部の不決断にあり、またひとつには、リープクネヒト・グルー

プの融通のきかぬ冒險主義にあった。リープクネヒトは、大衆デモを呼びかけ、これを蜂起への直接のきっかけにしようとした。それに反して、ドイツにいたボルシェヴィキ党の代表者は、一月二日の会議、革命的スローガンをかけたゼネストを準備し、漸次行動を武装蜂起にまで進めてゆくことを勧めた。

蜂起の日よりは十一月十一日と定められた。が、事態の急速な展開はすでに十一月九日、ベルリンの労働者に大衆デモを呼びかけることを、革命派指導者に強いた。労働者内部でいかに情勢が熟していたかは、早朝に諸工場のまえで呼びかけのピラが配られると、すぐに労働者がデモの呼びかけに応じたことからわかる。工場はぞくぞくと運動を開始した。ベルリンの諸大工場が行動の核となり、革命の核となった。兵営も、最初はたぬらいながら、運動に加わった。

十一月九日の朝、SPDおよび国会議員団の幹部会は、労働者を工場内にとどめて街頭に出すまいと、まだ試みていた。だが労働者は、革命派指導部の呼びかけに応じた。このことは、運動が第一歩をこえて進展すること、運動寡尊しようとするエーベルト/シャイデマンの試みを水泡に帰せしめることの可能性を、保証するものだった。

といつても、ドイツ労働者階級の大多数が政治的理解力に欠け、革命的経験に

欠けているという事実は、動かせなかった、労働者はそれらを、革命闘争の過程で、いまから身につけてゆかねばならなかった。意識的分子が十数年の経験をとおして身につけてきたものを、大衆は、革命のなかであつたたくし学びとらねばならなかった。

平和と社会主義への大衆の欲求は、八統一と団結という幻想と結びついていた。革命派指導部の正しい戦術は、これにもとづいて立てられねばならない。大衆の心のなかにおぼろげにはぐくまれていたもの、すなわち資本主義とミリタリズムとの除去、諸国民の殺しあいの終結が、労働運動の共同の闘争のための明確な条件として定式化されなくてはならぬ。それらの条件が、社会主義者の団結のための、最良の試金石である。こういう諸条件のもとでは、SPD指導部は旗色を鮮明にせざるをえない。SPD指導部は、社会主義革命の道をゆくことのぞんでも、行くことができもしないので、必然に大衆から孤立するだろう。SPD指導部をこういう状況に追いこむことが、ベルリン労働者の革命派指導部の先進的部分であるスパルタクス・ブントの、課題であった。

スパルタクス・ブントの

役割り

労働者大衆は、十一月九日の朝に街頭

に出て、状況を支配した。政府は存在しなかった。しかし、とくに兵士たちは、休戦協定の締結のため、なんらかの政府を緊急にもとめていた。労働運動のすべての政治潮流を包括する政府をもとめる声は、SPDに高く上がった。リープクネヒトは、SPDとともに政府を形成することを拒否していたが、この態度は大衆には理解できなかった。工場や兵営からの無数の代表団にせがまれて、リープクネヒトはつぎの声明を発した。

八わたくしは六つの基本的前提を定式化して、これが受け入れられれば入閣し、拒否されれば入閣しないことにしよう。社会主義革命のために不可欠なこの条件を認めるなら、認める者が皇帝派社会黨員だろうがさうでなからうが、わたしはかれと同じ内閣にはいってもよい。

1 ドイツは社会主義共和国となるべきであり、

2 この共和国では、立法・執行・司法の全権力が、全勤労住民および兵士の選出する代議員の手中におかれるべきである。

3 ブルジョアジーの成員は政府から排除される。

4 USPの入閣は、休戦協定の締結を可能にする政府をつくるための、三日間のみの臨時措置であり、

5 事務次官は、本来の内閣の技術上の補佐員としての資格のみをもち、

6 内閣には同じ権能をもつ二人の首班がおかれる

これらの諸条件のひとつひとつが原則的に主張しうるものかどうか、また、革命的情勢の要請に應ずるものかどうかを精密に問うことなくなされた行動は、戦術的にやむをえなかったが、政治的に未熟だった。

リープクネヒトのこの声明も、スパルタクス・ブントの指導部によるこの声明の否認も、ドイツ革命運動の前衛が政治的・組織的な結束に欠け、明確さを欠いていたことをしめしている。

SPD指導部は、この六項目をすげなく拒否した。この拒否を、SPD指導部の反革命的役割りを明らかにする広汎なプロパガンダのいとぐちとして利用することもせず、「スパルタクス・ブントは、」このエピソードをまづい誤診と見なし、忘却のころでも蔽おうとした。ブントの指導部は、とくに兵士のあいだに存在する気分を無視して、従来の路線をふたたび追求した。この路線は、十一月十日のアピールに明瞭に現われている。

八シャイデマンらとの与党社会党は、四年間きみたちを佈るべき戦争に追いこみ帝国主義のむきだしの野望が問題にすぎないのに、**△祖国▽**を守れと説教していた。ドイツ帝国主義が崩壊したいま、おかれらるブルジョアジーのために、なお救えるものを救おうとして、大衆の革命的エ

ネルギーを庄殺しようとしている。

もはやいかなる \wedge シャイデマン \vee をも、政府に坐らせておいてはならぬ。与党社会黨員がそこに坐っているかぎり、社会主義者たる者は、政府にはいってならぬ。四年にわたってきみたちを裏切ってきた者たちとは、いかなる協同もありえないのだ \vee 。

自発性と組織

スパルタクス・ブントが \wedge シャイデマンら \vee を社会主義革命の総振りとして指弾したのは、まったく正しかった。過去と未来がそのことを証明し、それは消すことのできぬ歴史的事実となっている。けれども、問題を前節のように提起することは誤りだった。

同じ日、前述のようにブッシュ・サーカスに、ベルリン労働者・兵士評議会が参集した。リープクネヒトは前代未聞の歓迎の拍手を受けた。しかしかれの演説の中で、気分は一転した。リープクネヒトが、SPD指導部を正当に告発し、かれらとの協同はありえないことを述べてゆけばゆくほど、場内の抗議の声が高くなった。労働者、とくに兵士の大部分は、なぜリープクネヒトが断じてSPDと歩みをともしない立場に立つのか、理解できなかつた。この状況ではエーベルトは有利だった。集会で優勢な気分恰巧みに順応して、エーベルトは、闘争や

流血はもうたくさんだ、いまや統一し固結して、敗戦後の新しい自由な一(もちらん)——社会主義的などドイツを建設しなければならぬ、てなことを述べた。こうして、社会主義革命を恐怖し非親していたエーベルトが、その日の勝利者となった。

たしかに、リープクネヒトが前日のように戦術的に正しく行動し、かれの正しい認識を大衆には前提しなかつたとしても、つまり、大衆の政治的成熟度の認識をもかれの認識にふくめていたとしても、この重大な集会で、政治的に無知な大部分の兵士大衆は、SPD指導部に追随したことだろう。(しかし)もしリープクネヒトがスパルタクス・ブントの指導部から全権をゆだねられて、ベルリン労働者・兵士レーテにたいし、問題をまったく現実在即して提起し、革命の課題を具體的に展開して、つぎのように述べていたとしたら、どうだろう。この四年半の布るべきできごとをムダにさせまいとすれば、ソヴェト・ロシアにならつて即時講和を締結し、社会主義ドイツを創らねばならぬ。この二つのことは、スパルタクス・ブントが出した要求(がみだされること)を前提とする。社会主義を目標とする以上、ラディカルな、徹底的な諸措置が現実化されなくてはならないから、われわれは、こういう領域にかかっている政府にだけはいることができ

し、はいろうと思う、と——もしリープクネヒトがこう語っていたならば、その後の革命の過程で、前衛が決定的な大衆からあれほど孤立することは、ありえなかつたろう。

一九一八年十一月の誤まつた実践は、スパルタクス・ブントの基本的誤謬と密接にかかわっている。すなわち、組織問題の軽視と、大衆の自発的な社会主義意識の過大評価である。

ブルジョアジーの地歩の再確立

シャイデマンが十一月九日、ドイツ人は \wedge 完全に勝利 \vee したと宣言したとき、新しい國家権力の担い手たる労働者・兵士レーテの道をささげられるような政治勢力は、SPDの右には存在しなかつた。大地主・軍部・ブルジョアジーといった支配階層は、政治の表面から消うせ、革命の成りゆきを思つて慄えていた。(だが)やがて、二つの事実がブルジョアジーをふたたび前面に進出させ、最初はおおつと、しかしだいに明瞭に、ブルジョアジーは発言しはじめた。「その二つの事実というのは」第一に、革命指導部のあてどない動揺であり、第二に——そしてとくに——革命の右派が \wedge 内政的に到達可能な \vee 目標としてかかげたブルジョア的・民主的の改革の宣言であつた。

ブルジョアジーの死活問題のひとつは、急速に國民議會を招集して \wedge 法と秩序 \vee を回復せよというかれの要求が、みだされることだつた。というのは、革命の日々に労働者階級が手中にした \wedge 革命の名による法 \vee を、ブルジョアジーは恐怖していたからである。かれらは、革命の進展が必然的に危険をもたらすことを、はつきり知つており、革命を議會的方法で窒息させることを狙つて、事態の進展を國民議會の統制下におこうと画策した。

革命の勃発直後には、ブルジョアジーは、切迫した危険を回避するためにみずから反革命行動をとることを、必要としなかつた。なぜなら、新しい人民委員政府の十一月十日の指示は、私有財産の保護といつたブルジョア的・民主的内容のものであつたし、十一月十五日の人民委員告示は、官吏の給与・年金・権利などを保証するものであつたから、別に口を出さなくても、ブルジョアジーの地歩は安泰だつたのである。かれらとしては、この政府を前面に立ててかれらの階級の利益を守らせ、この政府が革命の徹底的遂行のためにたたく労働者・兵士レーテや左派の勢力と対抗するのを、助けておけばよい。

すでに十一月十五日には、企業家は、労働組合を中央労働共同体なるものに組みこみ、始まつていた賃金闘争を抑え、

労働組合を革命の流行から切りはなすことに、成功した。革命の日々に社会化の礎石をおくことの代りに、SPD指導部の裏切り政策は、海干山千の企業家に、労働者階級の代表とひとつのテールを、囲んで社会化について審議することを可能にしてやったのである。この審議を遅しなく、不毛のまま引き伸ばすことによってブルジョアジーは、革命情勢のなかで、国民議会の成立までもちこたえることができた。ついでブルジョアジーは国民議会で、一九一九年三月の社会化法に相応の損害賠償を規定させ、さらには社会化法そのものを無効にさせてしまうことになる。

レーテ権力か国民議会議会か、 革命か反革命か

フリードリヒ・エンゲルスが一八八四年十二月十一日のペーベルあての手紙で予告していたことが、きわめて速やかに実現した。八月にせよ、危機およびそれに引きつづく日々へのわれわれの敵は、ただの民主主義を旗印として結集する全反動である。この人たちの民主主義は、十一月革命では、国民議会の招集を要求する諸勢力によって代表された。この諸勢力は、極右からUSPの一部にまで及んでいた。国民議会議会かレーテ権力か——これは、反革命か革命か、という両極であった。

この問題についての決定は、十二月十六日から二十日まで開かれた労働者・兵士レーテ総会にかけられた。会議の構成は、現実の大衆の気分按比例してはいなかった。スパルタクス・ブントのストリガンのもとに、ベルリンで二十五万の労働者がデモしていたのに対して、総会の議場では、ブントの代議員の数は一ダースにもみたなかった。しかしSPDは、四八五議席のうち二八八を占めていた。この事実が、ドイツ革命にとって特徴的であると同時に、スパルタクス・ブントの大きな欠陥をあらわしている。

カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクは、疑いもなくもつとも知られた革命指導者であったが、ふたりとも議席を得られなかったばかりか、オプザーヴァーとしてすら入場を認められなかった。

総会の議事日程の第二は、国民議会議会かレーテ体制かであり、これに関して主報告と副報告があった。スパルタクス・ブントの機関紙ハローテ・ファーンは、この議題の意味を明らかにして、こういつている。

△この議題において特徴的なことは：革命の中心課題が、国民議会議会かレーテ制度か、という二者択一として定式化されていることである。これによって、国民議会議会の招集は労働者・兵士レーテとその政治的役割との抹殺と同じ意味をも

つことが、少くとも公然と表明されている。政治的な力関係は、十二月十八日の同じくハローテ・ファーンで、つぎのように評価されている。

△全国会議は、二つの対立するファクターの圧力のもとで、自己の性格を明らかにしつつある。上からは、エーベルト／シャイデマン総司令部に結集したブルジョア反革命が、全国会議に圧倒的な圧力をかけ、会議を墮落させ、信頼のおけぬものにして、労働者・兵士レーテの機関に代る国民議会議会の招集に踏み切らせようとしている。十二月六日の騒乱（革命において初めて、この日、人民委員政府はデモにむけて発砲させた）、守備隊入城にさいしての示威、プロレタリアートの武装解除、△国民義勇軍の編成などは、このための策動だった。

下からは、同時に、目的意識をもつ断つたるプロレタリア大衆が、レーテ総会に圧力をかけ、総会の革命的意志を強め、総会を社会主義的・階級的な立場にしっかりと立たせ、十一月革命の混沌から生まれたレーテを、社会主義革命の進展のための鋭利な武器にしようとするといっている。

レーテ総会は、その会議の第一日から、その多数派、およびとくにSPD／USP両党の指導者が、レーテをプロレタリア権力の道具とする能力もたなけ

れば、意志もたないことを、もういちど証拠だてた。総会のみずからを去勢し、その自己去勢を、つぎの決議文に表現した。

△全政治権力を代表するドイツ労働者・兵士レーテ全国総会は、他日国民議会議による規定がなされるまで、立法および執行の権力を人民委員評議会に委譲する。

レーテ総会はこの決議によって、革命の第一段階は閉じられた。反革命がその頭をもたげはじめる。

これは、ハヴァス・トゥン／第五号（一九一九年刊）に掲載された無署名論文である。翻訳・紹介は、ハレス・ノウァーレ／グループによる。

なお、ハヴァス・トゥン／誌は、西ドイツSDSの一つのグループ（ドゥチエケを含む）の機関誌である。